

【その他】

『助教・助手の会』これまでの経緯と今後の展望 ～平成29年・30年度の活動を振り返って～

種本純一* 藤谷未来* 伊東智美* 狩野恵 河合直美* 櫛田恵美* 正源美穂*
白瀧美由紀* 須田彩佳* 濱松理絵* 瀧瀬恵* 渡辺温子*

【要 旨】

「助教・助手の会」は、教育力向上を目的に発足し、実習における学生指導の方法や学生の情報共有等を中心に活動をしてきた。今回、平成23年度の発足から現在に至るまでの経緯を明確にし、初めて本格的な活動計画を策定した平成29～30年度の活動内容を振り返ることによって本会の意義や目的、活動の方向性、参加者の意識に新たな進展がみられたため報告する。

平成29～30年度の活動における振り返りでは、参加者それぞれが関心のある事柄について学習していく機会となったことに加え、学生指導についての悩みを共有し、相談し合える場となっていることも明らかとなった。特に関心の高かった実習指導に関しては、学生の情報共有のみならず、自身の教授活動を振り返り、指導内容を検討することによって、本会の活動を学生の実習指導に還元できるとの意見が多くを占めた。具体的には、各参加者から気になる学生の報告があった場合は、その都度事例検討会として学習会を開催していくことが決定された。このような取り組みが主体的に行われることによって、参加者全員が意義のある活動であるとの認識のもと今後も本会を継続していくことで意見の一致がみられた。

【キーワード】 助教、助手、FD、自主的学習、実習指導

I. はじめに

文部科学省中央教育審議会（2006）では、「ファカルティディベロップメント（以下、FD）」を教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称としている。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。FDは「新時代の大学院教育－国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて－」（平成17年9月5日中央教育審議会答申）を受けて、大学院設置基準において義務化（平成19年4月1日より施行）され、平成28年度の大学設置基準等の一部を改正する省令の公布がされている。日本看護系大学協議会においても看護学教育に関する見解（2008）の中で、看護教員の能力向上の必要性を挙げFDの

推進を謳っている。このことに加え、若手看護教員の多くは実践経験や実践能力は豊富である一方で、看護学教育で重要視される実習指導などの教育経験や知識が少ないことから、若手教育を含め看護基礎教育の質保証に向けたFDの取り組みは必要不可欠であるとの認識が示されている（前田ら，2016）。

本学ではFD・SD推進委員会が設置され、その中で、若手教員の教育力向上を目標とした「助教・助手の会」（以下、本会とする）の活動支援を行っている。

平成23年度から始まった本会は、助教・助手の教員が領域にとらわれずに交流し、実習における学生指導の方法や学生の情報を共有することを目的として発足した。その背景としてあげられるのは、発足当時、実習検討委員会による全体会といった場がなく、学生の詳細な情報が実習を主に担当している助教・助手の教員へ十分に伝わっていなかったことが

ある。そのためFD・SD推進委員会が本活動を後押しする形で、学生についての情報を共有し、実習指導に関する悩みを互いに相談する場として定着していった。しかしその後、実習検討委員会による全体会が開催されるようになってからは、学生の状況が教員全体で把握できるようになったため、参加者からは本会の活動内容に疑問をもつ声も挙がっていた。本会を取り仕切る担当者や助教・助手の教員(参加者)の多くが入れ替わっていることもあり、今後意義のある活動を継続していくためには、本会の経緯や大学での位置づけについて改めて参加者全員が理解する必要があった。また、それぞれの活動を単発的に終わらせるのではなく、本会の目的・目標を参加者全員で検討、決定、共有し、目標達成に向けた年間計画を立案することも求められた。さらに、計画終了時はもちろん、活動中においても定期的にフィードバックを行い、目的・目標に沿った内容となるよう、柔軟に修正を行った。以上のような取り組みによって、平成29年度からは、本会の意義と方向性が明確に示されることとなり、「助教・助手の会」として本格的に活動を開始する運びとなった。具体的な内容としては、参加者それぞれが学びたいことについて意見を出し合い、プレゼンテーションを行ってもらうなど、ひとりひとりが自主的に参加できるような内容を計画した(表1)。このことによって、情報共有の場としての意味合いが強かった内容から、自分たちの最も関心の高い内容について学習する場へと方向転換することができた。

そこで今回は、平成23年度の発足から現在に至るまでの経緯をまとめ、初めて本格的な活動計画を策定した平成29～30年度の活動内容について詳しく説明し、新たなスタートを切った本会の活動について報告したい。

II. 「助教・助手の会」の目的・目標

平成29年度の第1回目の活動において、以下の通り目的・目標が立案された。

目的：実習を中心とした学生指導のための学習会を開催し、指導力の向上を目指す。

目標①看護過程の展開に関連した知識を身に付けることができる。

目標②本会での学びを実習指導に活かすことができる。

III. 参加者

参加者は57名、実数は16名であった。職位は助教9名(うち非常勤2名)、助手7名(うち非常勤6名)であった。参加者の領域は表2に示したとおり様々な看護領域からの参加がみられた。

IV. 活動内容

1) 平成29・30年度における活動時間

年3回の活動のうち、一度の開催時間を90分とした。平成29～30年度は全6回開催し、合計540分(9時間)本活動に取り組んだ。さらに学習会を開催する担当者の準備学習や資料作成、各参加者による自身の指導の振り返り、課題レポートの記述など、本会に参加するための準備を全員が行っていた。

2) 平成29年度 第1回助教・助手の会

- ①FD・SD推進委員の担当教員より、本会のこれまでの経緯についての説明
- ②教員間の交流を深めるとともに、実習指導についての意見交換
- ③本会の目的についての確認と平成29～30年度目標の検討

表1 活動計画と実際

	第1回目(4月)	第2回目(8月)	第3回目(12月)
H29年度	<ul style="list-style-type: none"> ・教員間交流 ・会の目的の確認 ・年間計画 	<ul style="list-style-type: none"> ・「看護学教員における授業展開」の学習 ・「経験型実習教育」についてーシート利用方法を中心にー 	<ul style="list-style-type: none"> ・各領域の指導で工夫しているところを共有 ・指導の振り返りを、前回の学習内容に基づいて考える
H30年度	<ul style="list-style-type: none"> ・実習における教授活動評価の実施 ・ヘンダーソンの枠組みの理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヘンダーソンの枠組みを実施してみても困難に感じたこと ・指導内容の共有 ・指導の振り返りを前回の学習内容に基づいて考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習における教授活動評価の実施 ・活動の評価

表2 参加者の属性

		人数 (%)
職位	助教	9 (56.2)
	(非常勤)	2 (12.5)
	助手	7 (43.8)
	(非常勤)	6 (37.5)
領域	基礎	1 (6.2)
	成人(急性)	2 (12.5)
	成人(慢性)	2 (12.5)
	老年	3 (18.8)
	地域・在宅	2 (12.5)
	母性	4 (25.0)
	小児	2 (12.5)
	大学での教育経験年数	平均3.6年 (SD ±5.47)
計	16 (100)	

平成30年度末時点

④今後の活動方針、活動内容(学習内容、担当者等)の検討

⑤平成29・30年度年間活動計画表を策定

3) 平成29年度 第2回助教・助手の会

①本会の目的について確認、平成29～30年度目標の決定

②『教授活動自己評価尺度—看護学実習用—の活用方法(舟島, 2013, 2015,)]』を参考として、実習前後の自身の教授活動を振り返り、次回共有することとした。(担当:濱松)

③『経験型実習教育』研修伝達報告会(担当:狩野)

4) 平成29年度 第3回助教・助手の会

①各領域において『実習時に工夫していること』に関する意見交換
ヘンダーソン理論による看護過程の展開方法、特に基礎看護学領域における指導内容(主に記録様式の活用法)について学習したいとの要望があった。

5) 平成30年度 第1回助教・助手の会

①ヘンダーソン理論を用いた看護過程の展開について、基礎看護学領域での指導内容を中心とした学習会(担当:種本)

②前回の要望に沿い、記録様式の活用とその指導方法を中心とした意見交換

6) 平成30年度 第2回助教・助手の会

①FD・SD推進委員より、本会の経緯および目的について改めて説明

②ヘンダーソン理論による看護過程の展開導入後の実習指導について意見交換

実習前後の「教授活動自己評価尺度—看護実習用—」を参考として自身の教授活動を振り返り、次回共有することとした。

7) 平成30年度 第3回助教・助手の会

①自身の教授活動の振り返りの発表

②今後の実習指導におけるそれぞれの課題について意見交換

③活動を振り返るためのアンケート調査の実施

V. 「助教・助手の会」を振り返って

1) アンケート調査(表3)

平成30年度第3回助教・助手の会終了後、本会の活動評価に関するアンケート調査を平成30年12月27日～31年1月10日に行った。参加者14名全員にアンケート用紙を配付し、12名から回答があった(回答率85.7%)。アンケートの内容、回答結果を表3に示す。アンケート調査の結果から、アンケートに回答した全員が、本会の活動を前向きにとらえ、自身の学習の場と考えていることが伺えた。その一方、年3回の開催では少ないが各教員の業務量を考えるとこれ以上の開催は難しいといった意見や、より学習を深め、研究等の業績に繋げるのであれば活動方法の再検討が必要であるといった意見も聞かれた。また、FD・SD推進委員に関わらず、本会に参加する教員の中で世話人を決めてはどうかという意見もあり、活動頻度や運営方法などの課題が明らかとなった。

本会の目標達成状況としては、『教授活動自己評価尺度—看護学実習用—の活用方法(舟島, 2013, 2015)]』を参考にした自身の教授活動の振り返りや、ヘンダーソン理論を用いた看護過程の展開について、基礎看護学領域での指導内容を中心とした学習会をとおして、「目標を情報共有から学習に変更し、毎回皆で自分たちの指導方法を振り返り、他の先生達の意見を聞くことで自分の教育観・看護観を見つめ直す機会になった。」「ヘンダーソン理論による指導内容からの意見交換が良かった。」といった声があった。よって、目標①『看護過程の展開に関連した知識を身に付けることができる』については概ね達成されたと考えられる。しかし、「ヘンダーソン理論に関してはまだ模索していることも多い現状があり、他の教員からもヘンダーソンに関して意見

が少なかった印象を受けた。」との声もあり、課題も残った。目標②『本会での学びを実習指導に活かすことができる』、に対しては、「他の先生のお考えや工夫、実習展開方法などを知ることができ、自分自身にも取り入れていこうと考えた。」や「今後の教授活動に活かせるような内容まで具体的に話し合えた。」との意見があったものの、実際に実習指導に生かすといったところまでは結びつかなかったため、目標の達成には至らなかった。より実践に活かせる学びの機会となるよう、より一層の研鑽が必要である。

2) 意見交換会

アンケート結果(2019年7月31日)を基に、平成29・30年度の活動内容について振り返り、意見交換を行った。以下に参加者の主要な意見をとりまとめた内容を記載する(表4)。

(1) 学習会について

ヘンダーソン理論の学習会については、すぐにも実習指導に活用できる優先度の高いテーマであり、学習会としての意義は大きかったようである。しかし、ヘンダーソンの理論とは別の枠組みをもって指導にあたっている一部の領域にとっては、ここで学習した内容をそのまま実習指導へ反映することができず、あまり意義を感じなかったのではないかという厳しい意見も出された。

実習指導の担当学生の事例を持ち寄った学習会では、学生との関わりを客観的に振り返り、困っているところを明確化するのに役立ったとの意見がだされた。さらに、学習会の中で困難感を共有したり、互いの実習指導において労い合う場が持ったことで自己肯定感を持つ機会となったという意見もあり、今後につながる内容であったことが伺えた。

(2) 今後の活動方針について

「その回ごとにいろいろなテーマを取り上げているため、振り返り(評価)が難しい。ひとつのテーマに絞って学習内容を積み上げていった方が評価しやすい。」といった意見が出された一方で、今までの内容は「実習指導に役立つ」ということを共通項であり、様々なテーマを取り上げているようにみえても、本会の目的・目標を意識した活動に基づいている。そうであるならば、ある程度活動に幅を持たせても良いのではないかといった意見もだされた。また、実習指導に関して、職位の近い教員同士が忌憚のない意見を出し合ったり、相談し合ったりする場は大事だという思いで本会は継続されてきた。今後はこ

のような場をさらに高度化し、実習目標を達成できない学生の情報共有と、「どう対応するか」、「どう伝えていくか」という具体的な指導方法を検討していく場になっていくことが望ましい。このことが、参加者全員の最も興味のある、向き合わなくてはいけないことであると同時に、発足当初から目指していたことでもあるという意見が大勢を占め、実習指導という実践を通して、自分たちが常に成長し続けていける場になったら良いとの見解で一致した。今後は、定例の年3回の情報共有と学習会に加えて、各参加者が実習指導中に気になった学生とともに自身の行った指導について発表し、実際の指導方法を検討していくこととなった。今後は事例検討としてそれぞれの実習指導を吟味していくためにも、関連文献を活用するなど、より具体的に学習方法を検討していくことが課題である。

実習検討委員会による全体会での報告は実習状況と結果は把握できても、一人一人の学習プロセスの詳細がわからないため、様々な領域の教員が集まる本会の強みを生かし、実習目標の達成が難しい学生の事例検討を行い、次回の実習指導へ引き継ぐことが望ましいとされた。しかし現在の年3回の開催では学生の情報共有に終始してしまう可能性があるため、各参加者から事例検討の提案として気になる学生の報告があった場合は、その都度学習会を開催していくことが決定された。この取り組みによって、領域別実習期間中もタイムリーに学生への指導方法を考え、実践していけるのではないかという意見で一致した。また、こうした話し合いの中で各参加者の内的動機付けがなされ、学習意欲が高まることによって今自分たちに求められている知識は何なのかといった問いに発展し、必要な研修や学会に自主的に参加する参加者が増えていくことも期待されている。

VI. おわりに

2年間の活動を振り返る中で、本会の活動が参加者それぞれが関心のある事柄について学習していく機会となり、学習効果そのものだけでなく、学習を通して、互いにねぎらう場面もあったことから、参加者間が似た悩みを抱えていることがわかった。そして、学習会に参加していくなかで、参加者の一番関心の高い事柄は実習指導であることを再認識し、学生の情報共有にとどまらず、「自分たちの指導を

振り返り、今後の実習指導に活かしていきたい。「教員にとっても学生にとっても有益なものにしていきたい。」との声が聞かれたことから、自身の教授活動を振り返る活動も必要であるとの共通認識を持つことが出来た。多くの領域の教員が参加している強みを活かし、タイムリーに学生の情報共有を行い、指導内容を検討することで、自分たちの活動を学生の実習指導に還元できると考えられる。学生の指導について、ツールを使用するか、何を評価軸にして検討していくか等、課題は多いが、まずは、この踏み出した一歩を無駄にせず、参加者全員が「楽しい」「意義がある」と思える活動を継続できることを第一とし、各々が現在の自身の教授活動を振り返りながら、新たな知識や学習の必要性を感じた時にまた新たな一歩が踏み出せるよう、今後も活動を進めていきたい。

文献

- 舟島なをみ (2013) : 看護学教育における授業展開
一質の高い講義・演習・実習の実現に向けて (第
1 版), 医学書院, 東京.
- 舟島なをみ (2015) : 看護実践・教育のための測定
用具
ファイル : 開発過程から活用の実際まで教授活動
自己評価尺度一看護学実習用一 (第 3 版), 医学
書院, 東京.
- 前田陽子, 柏崎純子, 八木絵里子 (2016) : 若手教
員の能力向上を目的とした助教助手の会の活動評
価, 第46回日本看護学会論文集看護教育, 127-
130.
- 文部科学省 (2002) : 中央教育審議会大学分科会制
度部会 (第21回),
[http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/
chukyo4/003/gijiroku/06102415/004.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gijiroku/06102415/004.htm). (2019年
4月3日閲覧).
- 文部科学省 (2016) : 大学設置基準等の一部を改正
する省令の交付について (通知),
[http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/
1369942.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1369942.htm). (2019年4月3日閲覧).
- 日本看護系大学協議会 (2008) : 2008年看護学教育
に関する見解,
<http://www.janpu.or.jp/wp-content/uploads/2009/02/2008kenkai>. (2019年4月3日閲覧).

表3 本活動に関するアンケート結果

n = 12

項目	回答	人数	%	理由
会の開催時間	短い	0	0	
	適切	12	100	
	長い	0	0	
会の開催頻度	少ない	1	8	・年3回は何をしても少ない。前回の内容も忘れてしまう。ただ、実習時期や業務量を考えると現実的に回数を増やすのも難しい。
	適切	11	92	
	多い	0	0	
会の目標にあった内容であったか	合っていた	2	17	・ヘンダーソンの枠組みを使用するようになり、その結果を受け実習での学生の状況などを話し合えたので。
	やや合っていた	10	83	・ヘンダーソン理論による指導内容からの意見交換が良かった。 ・ヘンダーソン理論をやってみて・・・が少なかった？ ・ヘンダーソン理論に関してはまだ、模索していることも多い現状。他の教員からもヘンダーソンに関して意見が少なかった印象を受けた。自己評価尺度の活用は自己の教授活動を見直すために効果的であった。 ・ヘンダーソン理論よりは自己評価尺度の活用による自己分析や自身の課題の明確化に重きが置かれた内容となっていたのではと思ったため。 ・実習指導での悩みや学生理解について話すことができたため。 ・目標を情報共有から学習に変更し、毎回皆で自分たちの指導方法を振り返り、他の先生達の意見を聞くことで自分の教育観・看護観を見つめ直す機会になった。本当はもう少し皆の話も聞きたいし、学習もしたいが年3回という機会の少なさ故に学びを深めることに限界を感じた。
	あまり合っていない	0	0	
	合っていない	0	0	
今後役に立つ内容であったか	とても役立つ	6	50	・実際の場面の話が聞けて、そこから話が進み、自分と照らし合わせて参考になった。 ・自己評価尺度に関しては今後も継続して活用することで、教授活動を見直す良い機会となることが考えられる。 ・他の先生のお考えや工夫、実習展開方法などを知ることができ、自分自身にも取り入れていこうと考えたため。 ・今後の教授活動に生かせそうな内容まで具体的に話し合えたので。 ・具体的にはスケールを実習前に見直すことを今後も続けたい。抽象的ではあるが、自分にとっては自分の教育観も看護観を改めて考える機会となったり、それに基づいてどのように指導していくとよいか考えることができる時間となっていることが有難いです。
	やや役立つ	6	50	・建設的意見が乏しい ・すぐ、形として役立つとは述べることができないが、共有できて参考にさせて頂いたり、同じ考えと思ったから。
	あまり役に立たない	0	0	
	役に立たない	0	0	

その他・意見・感想

- ・他領域のことはわからないところが多いので、話せる範囲で実際の学生との関わりや困ったことなどをお聞きしたい。
- ・〇〇先生、意見の取り纏め等ありがとうございました。自己評価尺度の取り組みは、とても勉強になりました。今回の助手助教の会で話されていたように、学生についての情報交換ができると実習に役立てると思えました。
- ・何かの業績につなげるのであれば開催頻度や内容の再検討が必要と思います。
- ・まずは試作として、学生の自己課題の引き継ぎを助教・助手間で運用してみても良いのではないかと。
- ・私にとって、毎回の取り組みが自分自身の振り返りに繋がり、今後の改善への動機となっているので、今後も目標を持って活動できたらと思います。
- ・領域を超えて話し合いをする機会を持てるのはとてもありがたいことだと思ってます。
- ・今年度、進行して下さった先生に感謝します。ありがとうございました。
- ・FD・SD委員会の先生の中に助教・助手がいる時があるときとないときもあるので、助手・助教の会の中でその年の世話人を決めていったら良いと思った。

表4 意見交換会の内容

n = 10

項目	意見
ヘンダーソンの看護過程について	<ul style="list-style-type: none"> ・実習現場で実際に使用されている看護過程なので、現場に即した学習ができた。 ・疑問に思っていたことを解決し、共通認識を持つことができた。 ・各領域によって看護過程にも特色があることが分かった。
事例検討・実習指導の振り返りについて	<ul style="list-style-type: none"> ・皆が困っていることを明確化することができた。 ・他の教員の考えや工夫、実習展開方法などを知ることができ、自分自身にも取り入れていこうと思った。 ・今後の教授活動に活かそうな内容まで具体的に話し合えた。 ・他の教員がどのような指導をしているのか勉強になったし、同じような悩みを抱えていることがわかってほっとしたし、労い合えた。 ・自分の指導内容について客観的な意見がもられた。 ・実習検討委員の全体会だけだと、指導部分の検討や、事例を追って見ていくことが難しい。この会は多領域の教員で構成されているので、前半で実習にいった学生指導について検討することで、後半指導にあたる教員の参考となるほか、皆で検討した指導が効果的であったか見ていくことが出来るのではないか。 ・領域の垣根を越えて、情報共有・事例検討することで学生の成長のプロセスと、成長につながったきっかけは何かを共有し、検討することで実習指導に活かせるのではないか。 ・実習の評価シートを参考に自身の教授活動を振り返った際、自分に足りていなかった視点を知ることができ、実習指導の幅が広がった。今でも使うことがある。 ・事例検討や実習指導の振り返りを行うだけでなく、皆で共有する、労い合う場にもなっていた。
研修について	<ul style="list-style-type: none"> ・経験型学習に関する研修のプレゼンテーションをきっかけに、各々で学生の事例を用いて話せたのがよかった。 ・自分たちには何が必要か、皆で持ち寄るとよいのではないか。 ・こういうことを知りたいと話し合いになったときや、こういう勉強が必要だと思ったときに、研修に参加できるとよいのではないか。
今後の活動について	<ul style="list-style-type: none"> ・実習の評価シートを参考にした振り返りや経験型学習、ヘンダーソンの看護過程の学習会など、一見やっていることがバラバラに感じるときもあったが、会の目的の「実習指導力の向上」というところはぶれていない。その時その時で、自分たちが関心のあることに取り組めた。何を目的にしていくかは今後もぶれないようにしていく。 ・教員それぞれが、何をやりがい・生きがいとしているか、何を大事にしていくかということについても共有できると良い。また、そのためにどう対応するか、どう伝えていくかまで検討していけたら良い。 ・学生が先に進めるような関わり方を全領域でできるよう、活動していきたい。 ・指導事例に関する情報共有を共有で終わらせるのではなく、どんな指導が合っていたか、どこが合っていなかったかの検討や、どこに躓きを感じていて、どのようにフォローできるとまくいのかなど、指導の内容やその方法の検討をしていきたい。 ・何かツールを利用しないと話がまとまらなかったり、どういった視点で学生を見ていけば良いか偏る可能性があるのではないか。 ・ツールを使って話をしていくのも大事だが、学生の実習指導の検討を行うには年3回の活動では足りない。皆の負担もあるし、続けることが大切なので、気軽に短時間で集まってみるのはどうか。 ・年3回の活動状況では会の目的を達成することが難しい。また、領域の垣根を越えて実習指導について話し合うことで、学生に対する関わりに役立つと考えられるため、メンバーから提案があった際は、回数にこだわらず主体的・積極的に事例検討会を開催し、問題解決に向けて活動していくことが良いのではないか。